

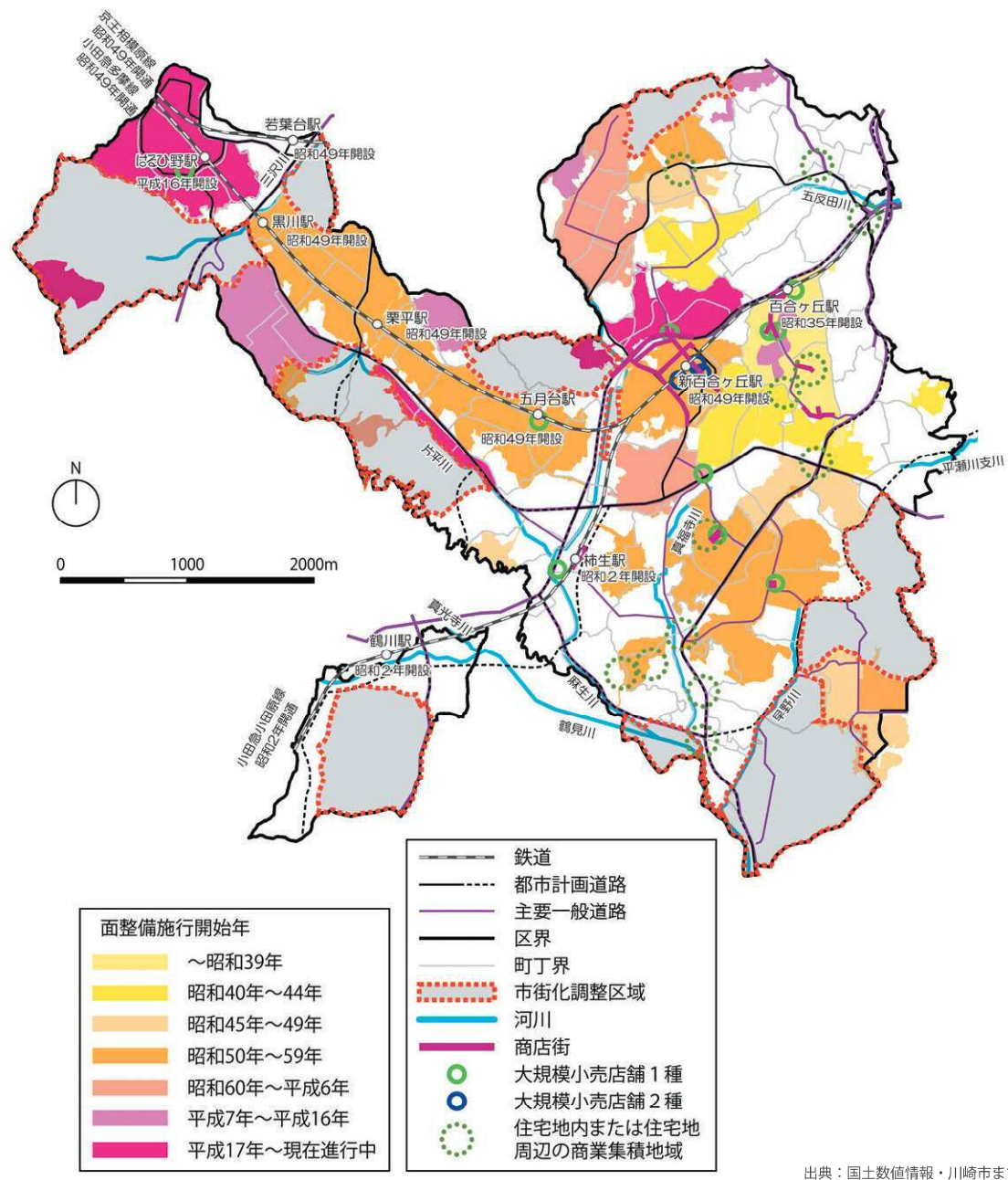
第2部

まちの現状

2 市街地の成り立ち

- 昭和 33（1958）年に日本住宅公団による土地区画整理事業により百合ヶ丘団地が開発され、この団地を核として周辺に民間開発の住宅地が広がり始めました。
- 昭和 49（1974）年に小田急線が多摩ニュータウンに延伸するのにあわせ、柿生や栗木など小田急多摩線沿線を中心に大規模な土地区画整理事業が行われました。その後も多くの地区で土地区画整理事業や民間による住宅地開発が行われ、東京圏のベッドタウン化が進みました。
- 新百合ヶ丘駅周辺では昭和 52（1977）年に大都市地域における住宅地等の供給の促進に関する特別措置法による特定土地区画整理事業が始まり、地域の中心的な市街地として、公共公益施設の整備が行われました。
- これら居住環境の整備に伴い大規模住宅団地の開発も相次ぎ、麻生区が誕生した昭和 57（1982）年以降、人口の増加が続いています。

■市街地の変遷

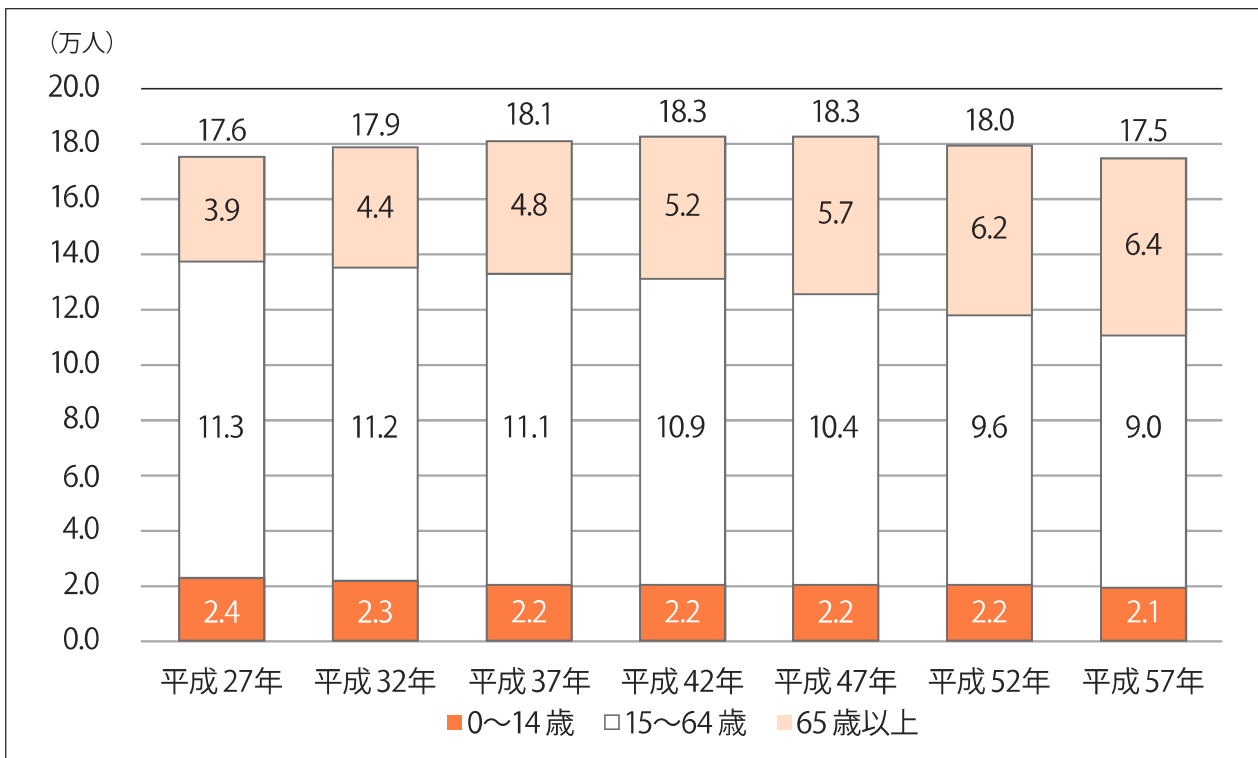


出典：国土数値情報・川崎市まちづくり局

3 人口

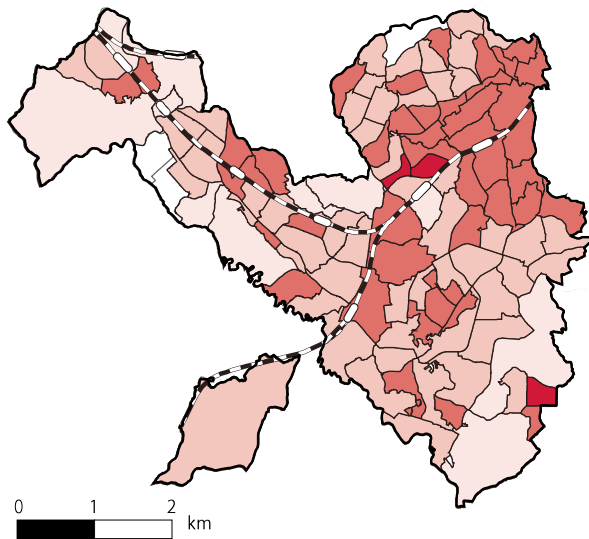
- ・麻生区の人口は平成 42 (2030) 年の約 18.3 万人をピークとして人口減少へ転換することが見込まれています。
- ・平成 57 (2045) 年 (約 30 年後) の人口は 17.5 万人と平成 27 (2015) 年と同水準の人口を維持しますが、年齢別の内訳を見ると、65 歳以上の高齢人口が 3.9 万人から 6.4 万人へと急激に増加することが予測されています。
- ・15～64 歳の生産年齢人口や 14 歳以下の年少人口は、既にピークを迎えており、今後は減少が続くと見込まれています。
- ・町丁別に人口動態をみると、鉄道駅周辺では、人口密度が 1 h a あたり 100 人を超える地域が多く見られます。
- ・また、平成 22 (2010) 年から平成 27 (2015) 年にかけて、鉄道駅周辺を中心に人口の増加が見られる一方で、駅から離れた丘陵部の地域では人口が減少している町丁が多く見られ、これらの地域では高齢化率も高い傾向にあります。このように人口減少や高齢化が進展する地域も見られることから、地区ごとの人口動態の特徴を踏まえ、高齢化や人口減少に伴う住環境や生活利便、地域コミュニティなどに関わる様々な問題を把握し、対応していくことが求められています。
- ・平成 29 (2017) 年の転出入は、転入 10,427 人、転出 9,579 人であり、転入から転出を差し引いた社会増減は 848 人の転入超過となっています。転出入は、多摩区、世田谷区、町田市との間で多く、鉄道沿線で行われている傾向が見られます。
- ・平成 27 (2015) 年の麻生区の昼間人口は 137,459 人、昼夜間人口比率は 78.3 であり、ベッドタウンとしての性格が強いまちといえます。

■将来人口推計 (年齢3区分別)



出典：川崎市将来人口推計 (平成 29 (2017) 年 5 月)

町丁別人口密度

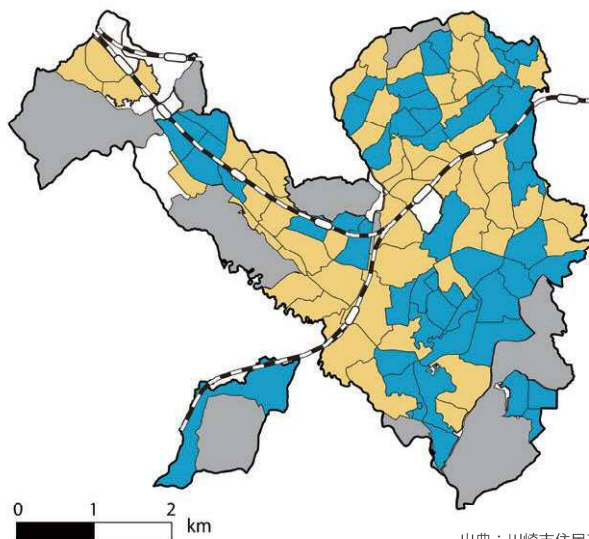


H27年人口密度

- 40人/ha未満
- 40-100人/ha
- 100-200人/ha
- 200人/ha以上

出典：川崎市住民基本台帳人口より作成（平成27（2015）年9月）

町丁別人口増減



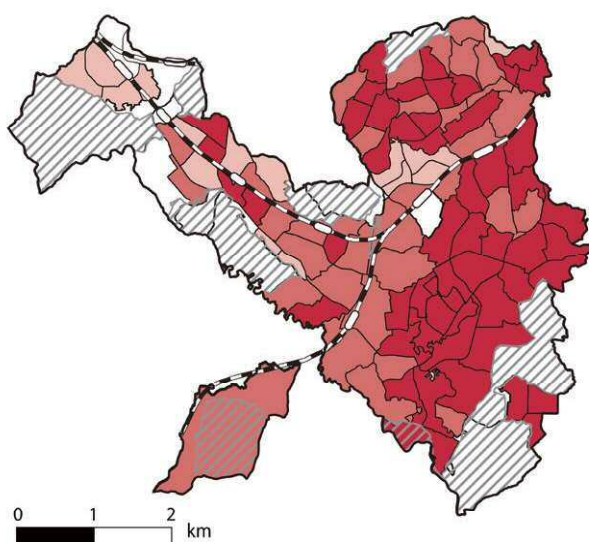
凡例

- 人口増加地区
- 人口減少地区
- 市街化調整区域

※着色のない地域は、町丁目単位で40人/ha未満

出典：川崎市住民基本台帳人口より作成（平成22（2010）年9月と平成27（2015）年9月の比較）

町丁別高齢化率



凡例

- 市街化調整区域

高齢化率

- ～7%
- 7～14%
- 14～21%
- 21%～

※着色のない地域は、町丁目単位で40人/ha未満

出典：川崎市住民基本台帳人口より作成（平成27（2015）年9月）

■転出入(平成29(2017)年)

転入	10,427人
転出	9,579人
増減	+848人

出典：川崎市の人口動態(平成30(2018)年3月)

■昼間人口(平成27(2015)年)

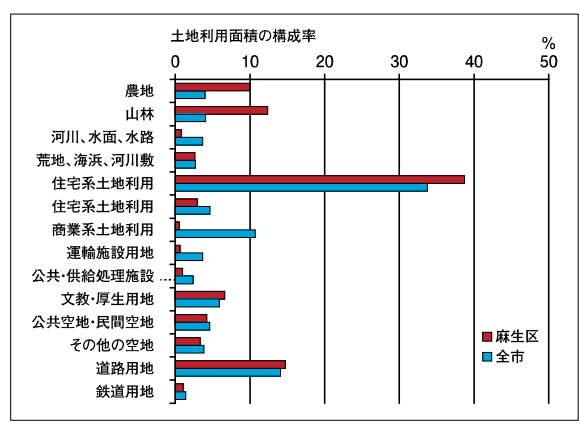
夜間人口	175,523人
昼間人口	137,459人
昼夜間人口比率	78.3

出典：川崎市の昼間人口(平成30(2018)年4月)

4 土地利用

- ・麻生区の土地利用面積の構成をみると、全市平均と比べて農地や山林の割合が2倍以上となっており、住宅系土地利用の割合も高い状況にあります。商業系土地利用の割合は全市平均より低く、工業系土地利用の割合も非常に低い状況です。
- ・区内には、多くのまとまった山林や農地が残されています。また、区を中心を除き市街地内にも多数の小規模な農地が分散的に残されています。
- ・新百合ヶ丘駅などの駅周辺、主要な道路の沿道などに商業系土地利用の集積が見られます。
- ・これらを除く場所の多くは住宅系土地利用で占められています。

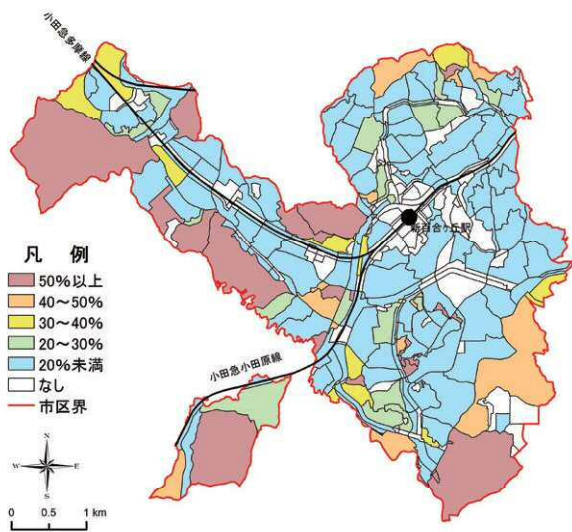
■土地利用現況図



出典：都市計画基礎調査（平成27（2015）年）

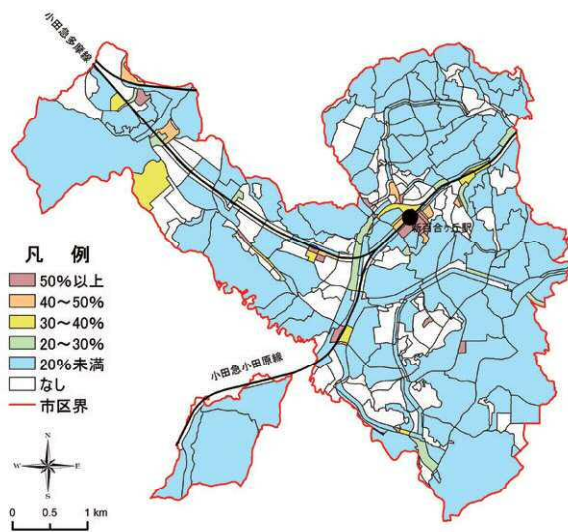
■自然的土地利用率図

$$\text{自然的土地利用率 (\%)} = \frac{\text{細ゾーン内自然的土地利用面積}}{\text{細ゾーン面積}} \times 100$$



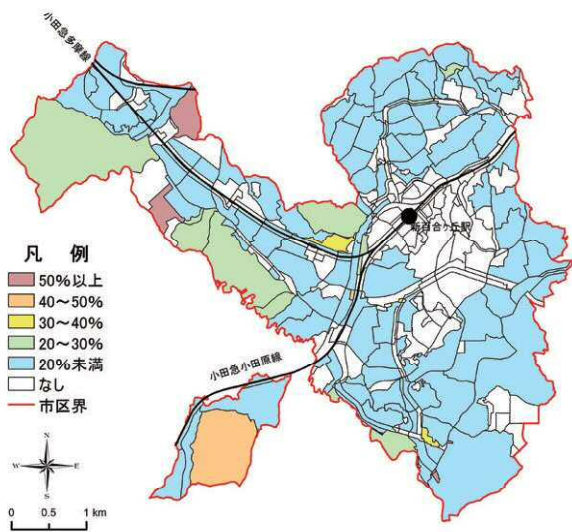
■商業系土地利用率図

$$\text{商業系土地利用率 (\%)} = \frac{\text{細ゾーン内商業系土地利用面積}}{\text{細ゾーン面積}} \times 100$$



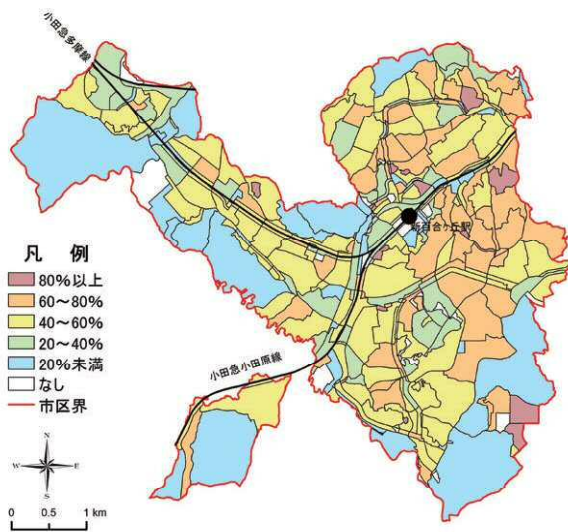
■農地率図

$$\text{農地率 (\%)} = \frac{\text{細ゾーン内農地面積}}{\text{細ゾーン面積}} \times 100$$



■住宅系土地利用率図

$$\text{住宅系土地利用率 (\%)} = \frac{\text{細ゾーン内住宅系土地利用面積}}{\text{細ゾーン面積}} \times 100$$



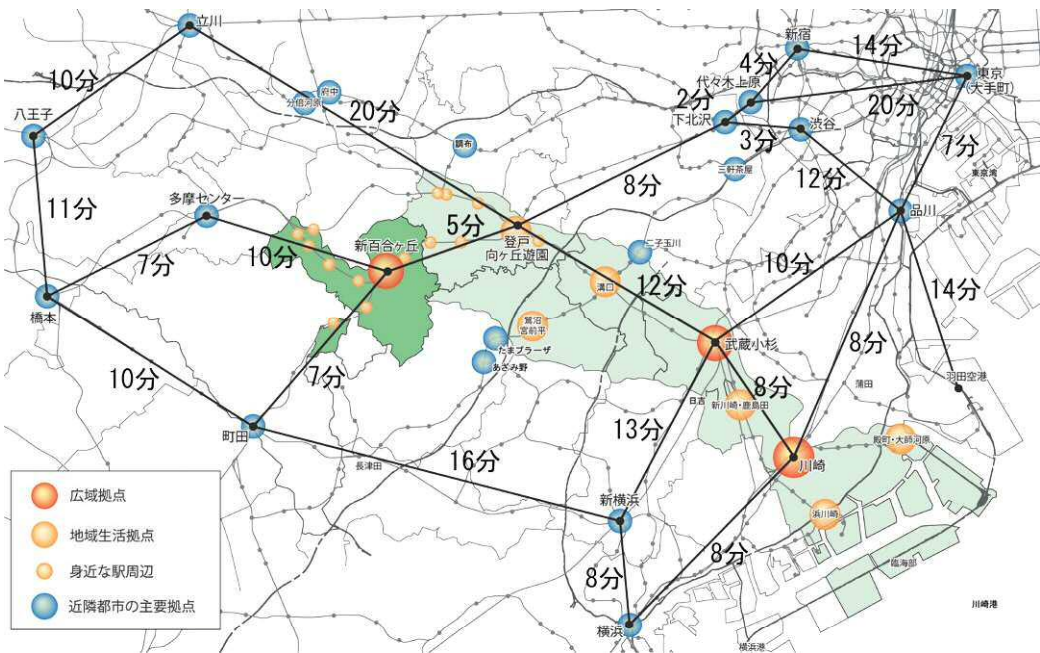
出典：都市計画基礎調査（平成27（2015）年）

5 交通環境

(1) 公共交通の状況

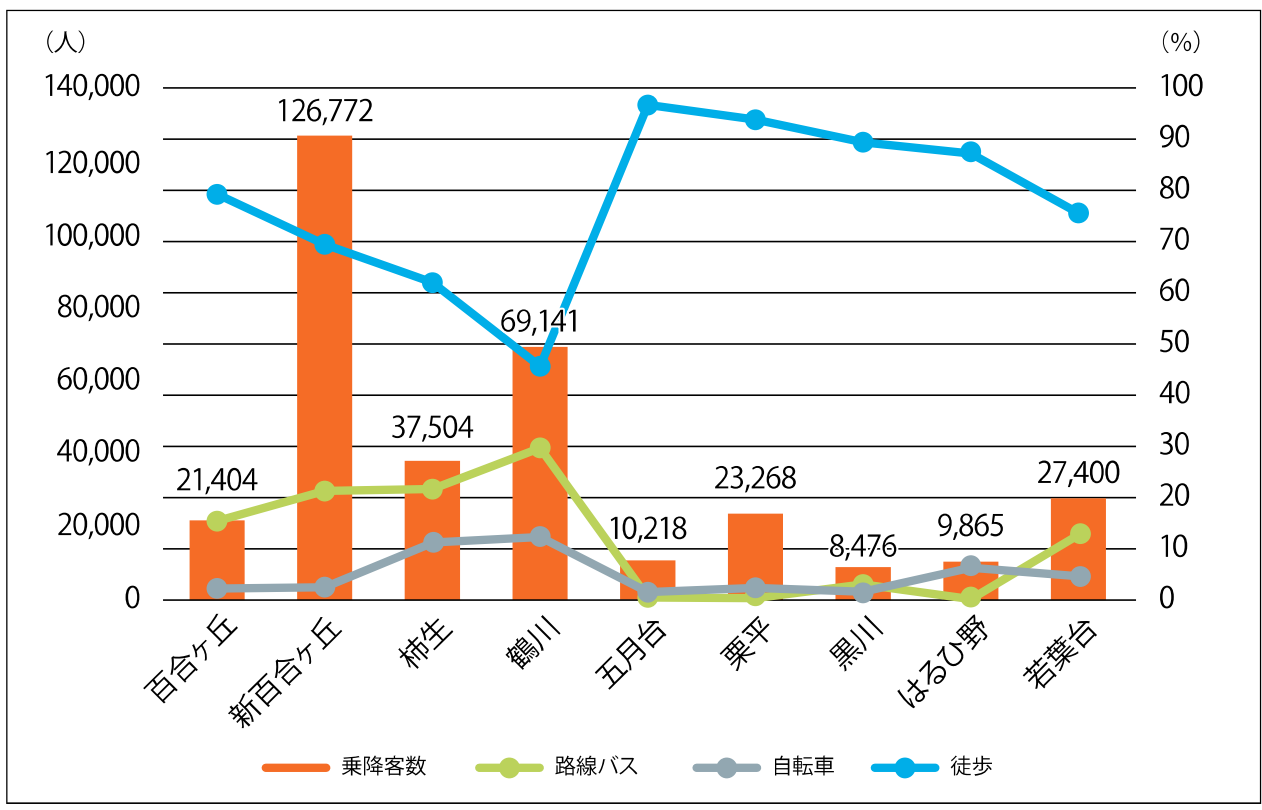
・小田急小田原線、小田急多摩線により、麻生区の骨格となる鉄道網が形成されており、放射方向に都心や多摩区、町田方面へとつながっています。また、路線バスについては、地域の大切な交通手段として、地域の特性や需要等に応じたネットワークの形成が図られています。

■主な駅間の所要時間



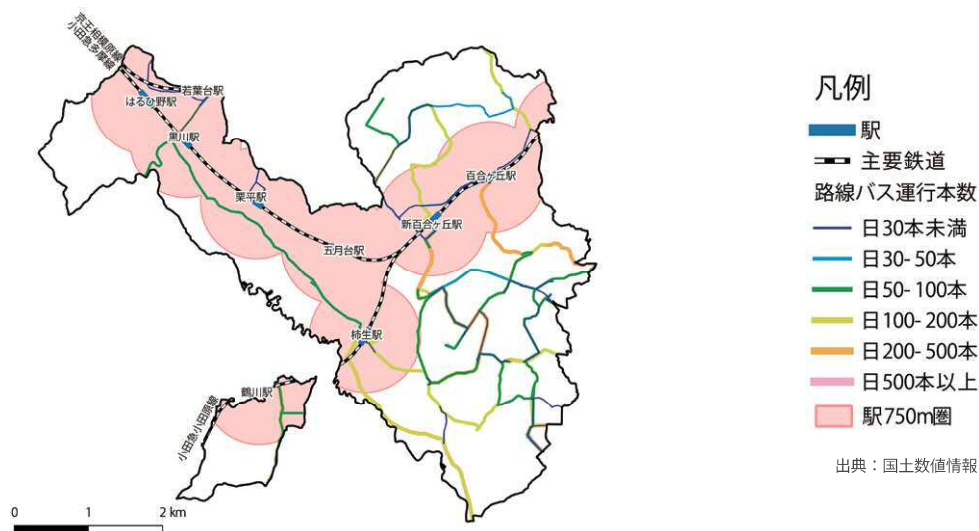
※図中の主な駅間に記載している各所要時間は、平成30(2018)年4月現在の各鉄道会社のホームページに掲載されている時刻表(平日)から算出しており、全ての列車種別(特急券等が必要な列車を除く)の中で最短の時間を記載しています。

■鉄道乗降客数と端末交通手段分担率



出典：鉄道各社HP(平成29(2017)年度)・東京都圏パーソントリップ調査(平成20(2008)年)

■路線バス網図



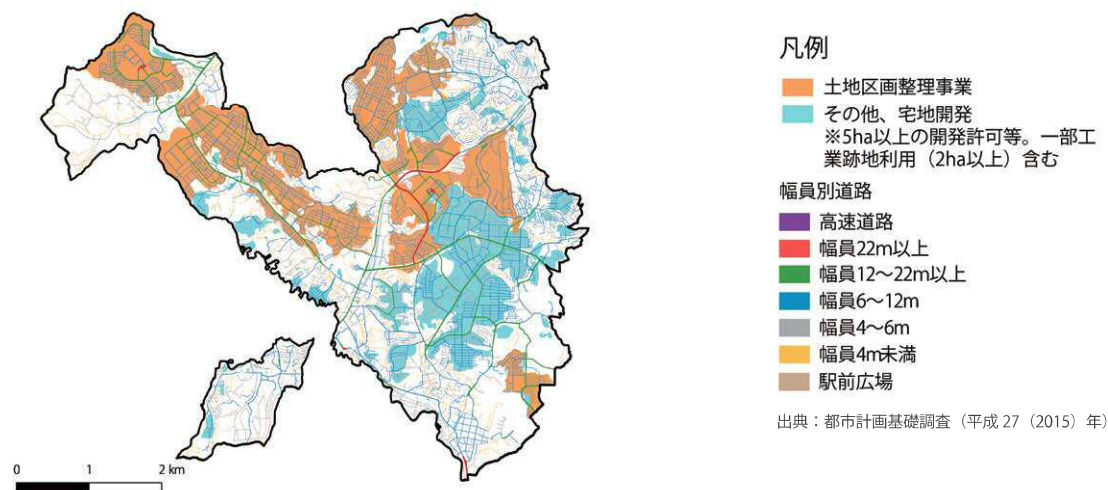
(2) 道路の状況

- ・麻生区の都市計画道路は、総延長約 42.9 km、完成延長約 25.1 km、進捗率約 59%となっています。
- ・区内で計画的に整備された地区では道路基盤が整っていますが、面的整備が行われていない丘陵地では、狭い道路が広がっており、課題を抱えた地区もあります。

■都市計画道路別進捗率（平成 30（2018）年 4月1日現在）

区	計画延長	完成延長	進捗率
川崎区	87,900m	64,922m	74%
幸区	22,680m	14,506m	64%
中原区	30,960m	21,200m	68%
高津区	36,690m	22,895m	62%
宮前区	42,700m	37,345m	87%
多摩区	41,770m	21,793m	52%
麻生区	42,860m	25,123m	59%
計	305,560m	207,784m	68%

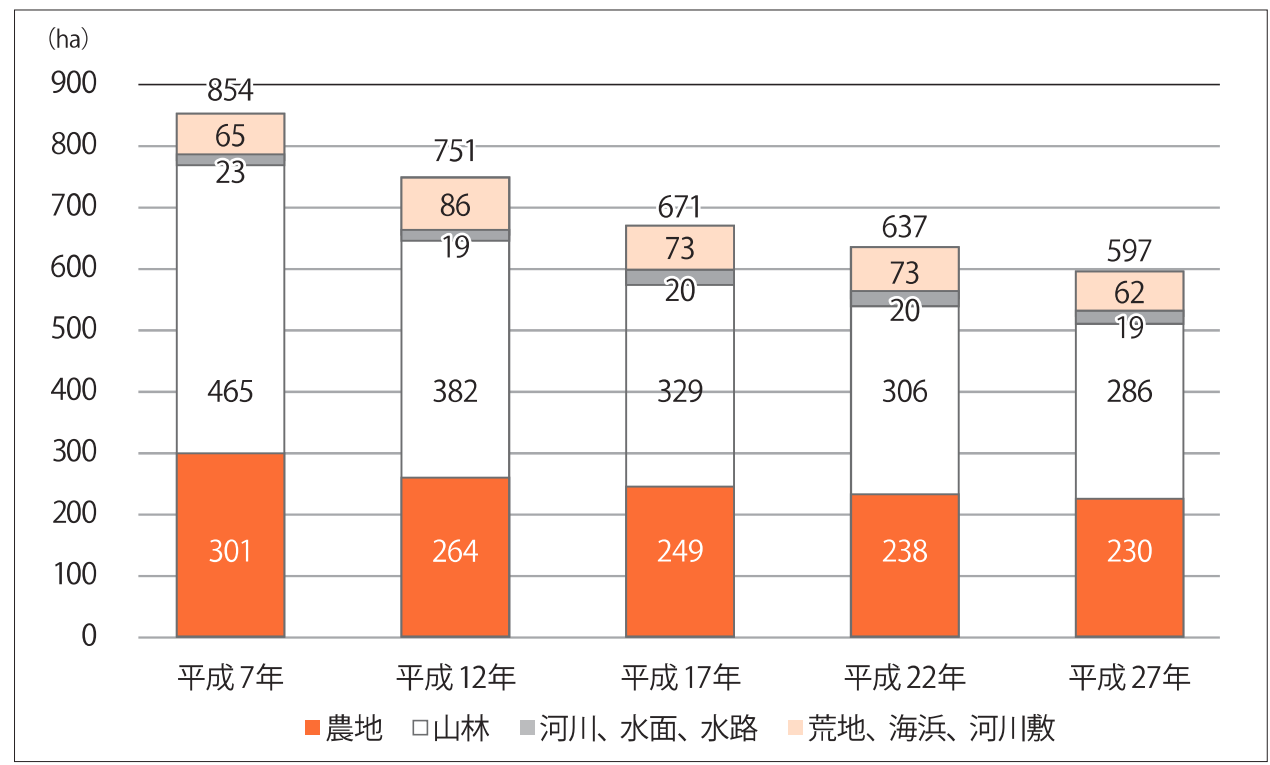
■道路網図



6 緑地や農地等の状況

- ・麻生区は、多摩丘陵の斜面緑地や農地をはじめ、豊かな自然環境を有しています。しかし、開発等により農地や山林などの緑地の総量は減少し続けています。
- ・区民一人ひとりが愛着や誇りを持つ地域の資源として、河川や緑地、農地などの自然環境の価値を引き継ぎ、高めていくことが求められています。

■自然的土地利用の推移

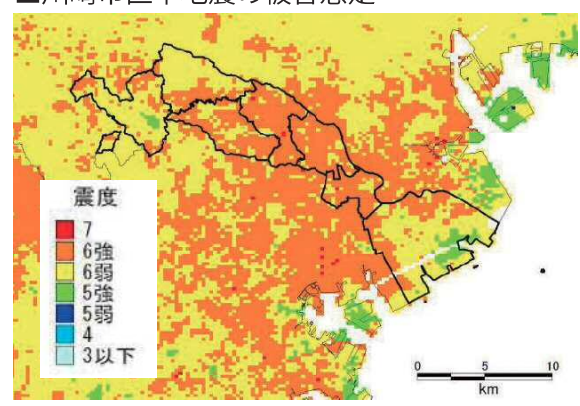


出典：都市計画基礎調査（平成27（2015）年）

7 災害予測の状況

- ・麻生区では、川崎市地震被害想定調査により、川崎市直下型地震（M 7.3）における区内の震度は5強～6強であると想定されており、建物被害が6,135棟（全壊・半壊合計）など大きな被害が予測されています。
- ・また、多摩丘陵の一角に位置しているため、崖が多く、市内の崖崩れの約半数が麻生区内で発生しています。

■川崎市直下地震の被害想定



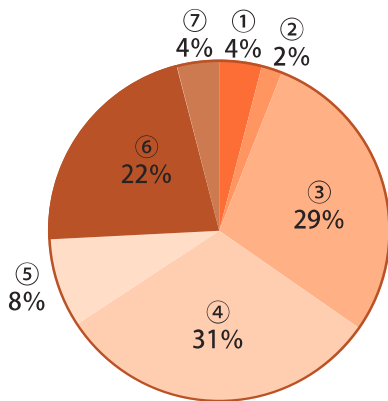
建物被害	
全壊	半壊
1,098棟	5,037棟
地震火災	
出火	延焼による消失棟数
16件	1,683棟
人的被害	
死者	重軽傷者
43人	1,148人

出典：川崎市地震被害想定調査（平成24（2012）年度）

8 協働のまちづくりの取組

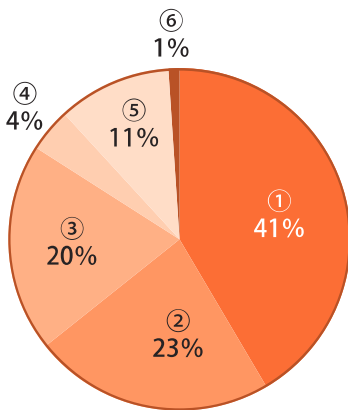
- ・協働のまちづくりに対する麻生区民の意向は、アンケート調査から、今後、まちづくり活動へ参加したいと答えた方の割合が高く、協働のまちづくりに対する意識の高まりが伺えます。
- ・また、まちづくりに関する情報提供の充実を求める意見が多くあり、まちづくりに関する情報周知を効果的に行い、まちづくり活動への参加を促進していくことが求められています。
- ・一方で、市民の交流と市民活動の支援を目的に開館された「麻生市民交流館やまゆり」を中心に、活発な市民活動が行われているまちでもあります。

■まちづくり活動への参加状況



①すでに参加している
②参加したい
③興味のある内容であれば参加したい
④時間的な余裕があれば参加したい
⑤参加したくない
⑥情報がない
⑦その他

■協働のまちづくりを進める上で最も重要なこと



①行政から市民へ、まちづくりに関する情報をもっと提供すること
②市民が積極的に活動しやすい環境をつくること
③行政と市民、企業、大学等が連携するまちづくりに関する組織をつくること
④企業、大学等が地域貢献しやすい環境をつくること
⑤市民が主体的にまちづくりの検討や提案ができるしくみを強化すること
⑥その他

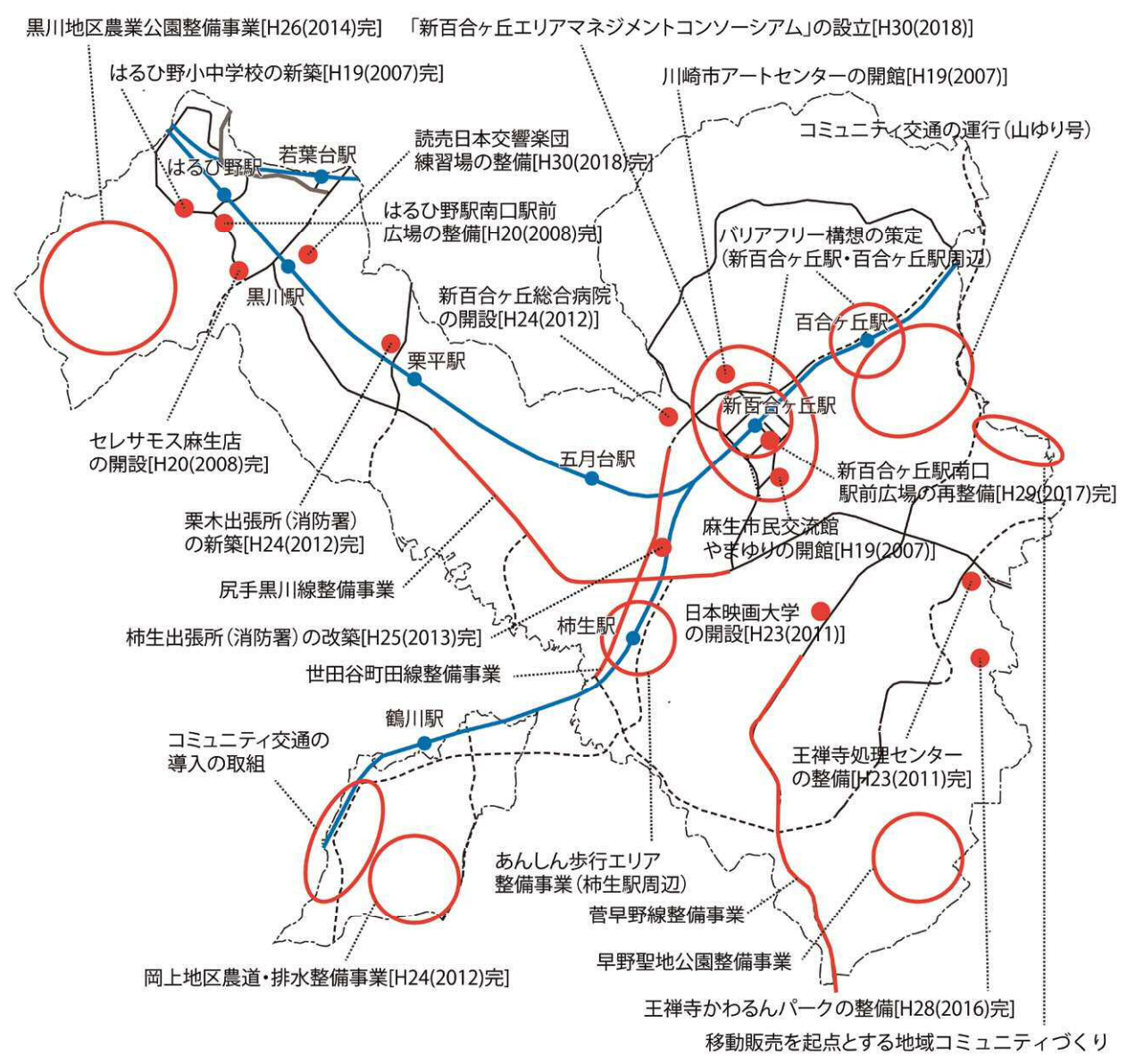
出典：都市計画マスタープランの見直しに関するアンケート調査（平成27（2015）年）

II 近年のまちづくり

従前の麻生区構想の策定（平成19（2007）年3月）以降、さまざまな主体によりまちづくりに関する活動が行われてきました。こうした活動をさらに発展させながら、今後のまちづくりにつなげていく必要があります。

ここでは、「近年のまちづくり」として、おおむね10年の間に行われた取組の中から、本市が実施した整備を中心に、地域主体による新たな活動も含めて、一部をご紹介します。

- ・新百合ヶ丘駅周辺では、駅南口の交通改善が図られました。
- ・また、川崎市アートセンターが開館し、アルテリッカしんゆりが始まるなど芸術・文化のまちづくりが推進されるとともに、新百合ヶ丘総合病院が開設されるなど、多様な機能の集積等により、広域拠点としてのまちづくりが進められています。
- ・麻生区を縦断する主要な都市基盤である都市計画道路尻手黒川線の完成に向けて整備が進められています。
- ・小田急電鉄と「小田急沿線まちづくり」に関する包括連携協定を平成28（2016）年度に締結し、地域特性や地域資源を活かした暮らしやすい沿線の実現に向けた取組が進められています。



Ⅲ 地域資源

地域資源は、地域の特性に応じたまちづくりを進めるうえで、活かすべき重要な要素のひとつです。ここでは、地域の施設や自然環境のほか、地域の活性化に貢献している機関や団体も貴重な地域資源と捉えて、その中から主なものをご紹介します。

- ・麻生区は、里地・里山など緑のうるおいにあふれ、一人あたりの公園緑地面積は約10㎡と、7区で最も高くなっています。
- ・黒川・岡上・早野の農業振興地域や農産物直売所「セレスモス麻生店」があり、平成24(2012)年には「明治大学黒川農場」が開場するなど、農業資源に恵まれています。

①王禅寺見晴し公園



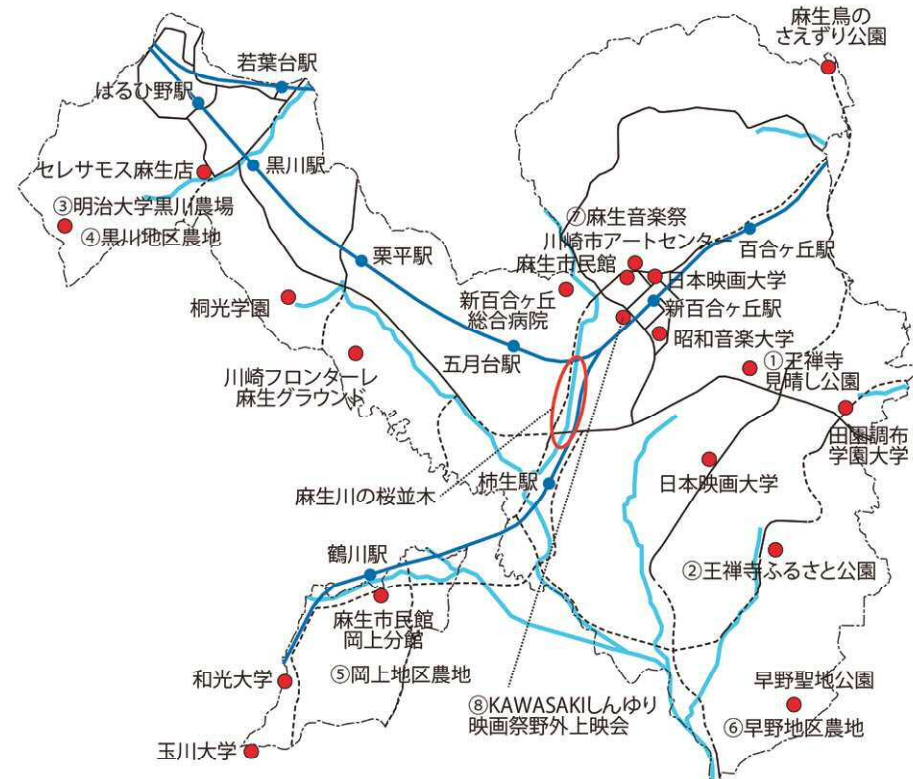
②王禅寺ふるさと公園



③明治大学黒川農場



④黒川地区農地



⑤岡上地区農地



⑥早野地区農地



⑦麻生音楽祭



⑧KAWASAKIしんゆり映画祭野外上映会



- ・麻生区内には、「昭和音楽大学」、「日本映画大学」、「川崎市アートセンター」など芸術・文化関連施設等が集積し、新百合ヶ丘駅周辺では「アルテリッカしんゆり」、「麻生音楽祭」など、さまざまな芸術・文化イベントが開催されています。
- ・また、「劇団民藝」や「読売日本交響楽団」も区内に拠点を置いています。